

人間ならざる者のための映画上映を垣間見て 映像学

この映画は自分だけのために作られたかのようだ、と独り合点してしまうマイベスト映画に出会ったことはありませんか。では、まるで自分の存在など気かけず平気で存在している映画、あるいは人間ならざるものに向けて映写される映画を外から覗き見る体験はどうでしょう。映像学研究には、個別の映画の分析のほかに、観客の誰もが否応なしに依存せざるを得ないインフラ（劇場の暗闇、サブスク、電力等々）について考える「装置論」という考え方があります。この装置論が、これまで映画観客＝人間と決めつける偏見を自明視してきたこと、その結果、世界的に見れば珍しくない精霊を相手に映画を上映する習慣が見過ごされてきたことを問題視するメー＝アーダードン・インカワニットの論文を最近授業で取り上げました。授業では、能楽なども本来は人間でないものに捧げられていたなど関連分野の話は出ましたが、映画となると身近な例が見つかりません。その翌日、たまたま訪れた東京都現代美術館で、山城知佳子の映像インスタレーションを見て、ハッと驚きました。部屋の前方は低い木の椅子が整然と並んでおり、その上にはぬいぐるみのようなノームのような先客が陣取って暗闇の中でスクリーンを凝視しているのです。人間の私は、邪魔にならぬようひっそり後ろで（昔話で天狗の酒盛りを覗き見るように）観ていると、不思議な解放感があるのに気がつきました。ちょうど言葉のわからない街で映画館にふらっと入り、全く自分のことなど眼中にない映像作品を字幕もなしに観る時の解放感と同じ類です。映像学研究の楽しさの一つである、「私」の殻を脱した視座から観る試みについてのエピソードでした。

小川翔太 准教授

精霊への上映の準備をする巡業映写技師一座、メー・アーダードン・インカワニット「アニミズム的映画のさまざまな物語」『第14回恵比寿映像祭コンセプトブック』東京写真美術館 2022年から転載



大学で学ぶ「日本史学」 日本史学

皆さんは「日本史」と聞くとどんなイメージを持つでしょうか。高校で教科書の内容を一生懸命覚えたあの日本史を思い浮かべる方がいるかもしれませんが、大学で学ぶ日本史学は高校までの日本史と少し違います。大学の日本史学では、教科書の内容を習うのではなく、史料の読み取りやそれをもとにした研究が中心になります。史料とは、過去の人物たちが何らかの目的をもって記し、何らかの目的をもって私たちの時代まで遺してきた古文書や古記録を、過去を知るための材料としたものです。高校の教科書などの一角に古文・漢文の古い言い回しで書かれた文章が書かれていたのを覚えているでしょうか。それらも史料の一部です。過去の人々が遺した言葉との対話から何を読み取るのか、そこから何が言えるのかを考えるのが大学の日本史学の研究になります。

新型コロナウイルスの影響で、一時は日本史学の研究に関する講義や、史料読解のトレーニングである演習がオンラインで行われていましたが、最近是对面の授業も再開し、演習の準備や発表の場面で、同じ日本史学を学ぶ仲間たちと協同する機会が増えてきました。興味関心や注目する点は人それぞれで、自分とは異なる視点が日々自分の刺激となっています。

日本史学の学びは研究室に止まりません。普段の学びは史料からの読み取りが中心ですが、フィールドワークへ出かけることも多々あります。史料をただ眺めているだけでは歴史像の全貌は掴めません。現地の空気に触れ、跡を辿り、碑を前にして得られる新たな発見があります。

私たちは日本史学研究室で頭を動かして、身体を動かして、ときに口を動かして交流を生みながら、日々学びを深めています。

後藤竜太郎 学士課程4年

くずし字の史料を読む演習授業の様子



「昔のもの」の力に触れる 西洋古典学

私は「昔のもの」が好きです。技術が進んだり、新たな言葉が生まれたりして表現の幅が広がっている現代の音楽や小説よりも、クラシック音楽や、古典文学作品の方が好ましく感じるものがしばしばあります。皆さんの中にも、そのような経験がある方は少なからずいらっしゃるのではないのでしょうか。そうした「昔のもの」は、当時の技術を最大限に活用して生み出され、時代や場所を超えて、現代に生きる私たちの心にまで何かを訴えかけています。その熱意や、それを後世の人々が汲み取って保持し、伝えてきたという歴史的な重みによって生み出される、遠く離れた「昔」と「今」を繋ぐことさえ可能にする強さ。それこそが「昔のもの」の持つ力だと私は考えています。そうした素敵な「昔のもの」に触れたいという思いから、私は文学部を志望しました。

さて、西洋古典学が研究対象としている古代ギリシア・ローマには、当然そのような「昔のもの」が多くあります。特に神話や叙事詩、寓話に関しては、昨今では登場人物が漫画やゲームのキャラクターのモチーフになることが増え、私たちが触れる機会も多くなっています。何千年も前の異国で生まれた神話が、現代の日本で創られる物語の助けになっている。その事実だけでも、西洋古典の物語が持つ力を十分に感じられるのではないのでしょうか。

「昔」と「今」を繋ぐ、というのはおよそ文学全般に共通する性質ですが、中でも古代西洋の文学や文明は、国も時代も大きく異なる私たちの心さえ打つような、絶大な力を持っています。皆さんも是非、たくさんの「昔のもの」に触れて、その力を感じてみてください。

大熊悠仁 学士課程3年

『イリアス』ヴェネツィアA写本



月刊 名大文学部 第128号

隔月刊行



編集発行：
名古屋大学文学部広報体制委員会
koho@hum.nagoya-u.ac.jp
寄稿者の所属と学年は寄稿時点のものです。
2022年7月10日発行